

「不易」と「流行」 誠実・克己・忠恕

～文学紹介者 ^{かしらぎ} 頭木弘樹さん～

大学生の時、激しい下血に襲われる難病を突然発症し、13年に及び壮絶な闘病を経験。その夢も希望も抱けない人生の絶望期を支え、再び起き上がる力を与えてくれたのが読書だった。その経験をもとに「文学紹介者」として活動されている頭木さんのインタビューです。

読書のスタートはフランツ・カフカの『変身』だったと答えていらっしやいます。

（フランツ・カフカは、現在のチェコ出身のドイツ語作家。プラハのユダヤ人の家庭に生まれ、法律を学んだのち保険局に勤めながら作品を執筆した。どこかユーモラスな孤独感と不安の横溢する、夢の世界を想起させるような独特の小説作品を残した。）



——いま人生に苦しんでいる方に伝えたい文豪の言葉、作品から得た学びなどはありますか？それは、カフカの日記や手紙に出てくる次の言葉ですね。

「将来に向かって歩くことは、ぼくにはできません。
将来に向かってつまづくこと、これはできます。
いちばんうまくできるのは、倒れたままでいることです。
生きることは、たえずわき道にそれていくことだ。
本当はどこに向かうはずだったのか、振り返ってみることさえ許されない。」



フランツ・カフカ

入院してしばらくは、何とか起き上がらなきゃいけないと焦ってばかりいました。でも、このカフカの言葉に接して「しばらく倒れたままでもいいじゃないか」と考え方を転換することができたんです。

人間は右肩上がり成長しなければならぬものだという価値観でいると、むしろどんどん辛くなり、起き上がれなくなってしまうこともあるということに気づいたんです。

逆に倒れたままでいる期間も人生にはあるんだという心境になれば辛さも減るものです。

そのためにはいろんな人生の物差し、価値観を自分の中に持って生きることが大事だと思うんですね。

一つの価値観だけで生きていけば、私のように病気などで突然、それに当てはまらない人生に入り込んだ時に自分を否定するしかなくなってしまう。

でも、世の中にはいろんな考え方、人生のあり方があるんだと知っていれば、これまでの価値観が機能しなくなった時、“物語の書き換え”ができるようになるんです。

要はシナリオライターのように、自分の人生の物語を書き換える。

そしてこれに役立つのが、様々な価値観、生き方を描いた文学だと思うんです。

ここに読書の効用がある。

『致知』2021年12月号 「絶望体験が教えてくれたこと」より

日ごろからたくさん文学に触れ、いろんな考え方、人生のあり方を知り、「手持ちの物語」を増やしてみませんか。

それが、これから必ずやってくる「思い通りにならないこと」や「困難」に直面した時、君たちに自身が、君たち自身にアドバイスを与えてくれたり、救いになったり、心の支えになるのだと思います。

この通心（信）も、「手持ちの物語」を増やすのに役立ってくれたらと思っています。

頭木さんは、「絶望読書—苦悩の時期、私を救った本」（飛鳥新社）などの執筆活動のほか、NHK「ラジオ深夜便」の“絶望名言”のコーナーに出演されています。